(2) おしゃべりの危険ゾーン

おしゃべりとはインフォーマルな会話のことを指す。「自分の机を離れたら公共の場と思え」と教えられたことがある。自分の机を離れたら誰が聞いているか分からない。迂闊なことでも言ってしまえば、信用に関わってくる。

おしゃべりの危険ゾーンの一つは、化粧室、休憩室、自販機コーナー、喫煙エリアなど。これらの場所には多様な人が集まり、仕事モードからオフモードとなって気が緩む場所でもある。誰が聞いているかもわからないから、仕事のことや他人の悪口などは決して口にしてはならない。逆に、そのような場所だからこそ、インフォーマル情報を得やすいこともある。敢えて喫煙エリアにやって来て、気軽に若手社員と話すことを好む役員もいるそうである。

会議やプレゼンテーション終了後の廊下やエレベーターも危険ゾーンである。特にエレベーターには外部の人もいるので要注意。筆者はかつて副社長の秘書をしたことがあるが、面白いことがあった。副社長がエレベーターホールまで見送る客―このような客は大企業のトップなどのいわゆるＶＩＰの客であるが―に対して、秘書の私はエレベーターに乗り一階玄関まで見送ることになっていた。そのエレベーターの中でのことである。

お客は、エレベーターのドアが閉まるまで副社長に対して丁寧に頭を下げ、へりくだった態度をとっていた。ところが、ドアが閉まった途端にお付の部下―このような人には必ずお付の部下が 2・3 人付いてくるのだが―に向って、「おい、今日は上手くいったぞ」と誇らしげに言うのである。「俺は大したものだろう」とふんぞり返らんばかりの態度である。秘書の私がすぐ側にいるにも拘らず、私は眼中にない。お付の人たちは、「さすが○○ですね」と、これまた私の存在を気にせずにゴマをする始末。

一方では、エレベーターのドアが閉まると同時に、隅で小さくなっている私に、「秘書さん、今日は有難うございました」と丁寧に挨拶をしてくれる人もいた。このような人のお付は、エレベーター内では私語をせず、目礼を以て私に感謝の意を伝えていた。このような客に対しては、玄関までの見送りに止まらず、車まで付き従って見送ったものである。

後日、副社長との雑談の中で、これらの客に対する品定めが行われたことは言うまでもない。エレベーター内のほんのわずかな時間の出来事が、その会社の評価となってしまう。信用できる会社か否か、企業風土や体質は付き合う会社たり得るか否かといった判断の一助として、その経験が生かされた。

職場近くの飲食店もおしゃべりの危険ゾーンとなってしまう。近くの飲食店には会社の関係者が多くたむろしている。昼休みや勤務時間終了後のオフモードに入った時、こんな場所で余計なおしゃべりをしていると、知らぬ間に、誰が聞いているかわからない。特に、アルコールが入ると危険度は増すばかりでる。固有名詞を出してのおしゃべりは厳禁。